

政権は構成より機能が大切

田中 それでは、つぎに国内の政治問題に移りたいと思います。わが国は戦後から今まで、ずっと保守党の単独政権が続いてきたわけですが、最近になり、この保守単独政権がこれから先どこまで続くかということ、国民の中には非常に疑問を持つ向きもあります。近く改革が逆転して、連立政権の誕生ということも考えられている。実はこの間、経済同友会がアンケート調査をやりましたが、それによると、今後十年以内に保守単独政権はなくなるだろうという予想を、日本の中堅経営者の方々の七割近い人達が出している。自民党の単独政権が、一体今後どのくらいの間続くものなのか、また続かせるべきなのかどうか、いろいろ予想はあると思うのですけれど、保守単独政権の将来性についてお話をいただきたい。

大平 政権を問題にする場合に、どの党が政権を構成するかという、構成でみる場合と、その政権がどのような機能を果たすかという、機能でみる場合とがあります。

私ばかりに自民党の単独政権下にあつても、その政権が十分機能しない状態はよくないと思つたのです。単独政権でなく、かりに保守連立政権でも、その政権が非常にスムーズに機能していけば、その方が望ましい。極端にいうと、そのように言えると思ひます。だから保守単独政権がよいのか、それとも保守連立が好ましいのかという問題の取り上げ方でなくて、政権を機能的にみて、一番有効に効率的に機能する状態はどうかという視点からものをみるべきじゃないかということ、私は政局をみる場合に、まず考えるべきではないかと思つたのです。

それから、つぎに、考えておかねばならんことは、最近、多党化ということがよく言われます。現に自民党のほかに野党らしいものが六つもできてきたわけです。従来政治評論では、わが国では二大政党が望ましく、多党化ということは、あまりよくないとされてきた。政党が二大政党に絞られ、交互に政権が交替するアメリカ式のゆき方がいいんじゃないかと言つておりました。ところが、そんなことにおかまいなく、価値観が多様化するにしたがつて、現実には政党がだんだん多くできてきて、国会に議席を持っているものだけでも、自民党を含めるとすでに七つになった。さらに国会

に議席を持っていない政党というのは何百とあるようになった。

田中 赤尾敏さんの日本愛国党も、その一つでしょう。

大平 世の中は単独政権の方向に、つまりインテグレートする方向にいつているかというところ、そういう方向にいつていなくて、分化する方向、ディファレンシエイトする方向に向いております。

田中 そうでしようね、現実の動きは。

大平 政党はだんだんと多くなつていく。そういう現実を、まず踏まえてかからねばならないように思つんです。

しかしながら、どこまでも浜の真砂のように政治勢力が限りなく細分化されて、その中枢になる、バックボーンになる勢力がなくなるといふことは、これまた非常に困つたことなんです。ちようど政治の機能がクラゲみたいに、背骨がない軟体動物のようになつてしまつて、風のまにまに、波のまにまにフロートするといふようなことになりまますから、それはあまり望ましくくない。

そういうようなことを前提にして考えると、あなたのご質問に対して私は、自民党の安定過半数の上に安住できる単独政権は望ましいことであり、そしてそのために努力しなければならぬが、これは現在相当にむずかしい環境にあるように思っています。そこでまず、安定過半数はむずかしくても、自民党はあくまでも政界におけるバックボーンとしての力量を持ち、責任を、きちんと果たさなければならぬと考えております。

国会の運営においても、私は部分連合という形で、自民党が一つの案件を提示し、野党に賛成か反対かを問い、ある政党は反対ということもあるし、またある政党は、そこをちょっと直してくれたら賛成に踏み切ってもいいという。そのような反応を確める。そのように、一つ一つの問題についてパーシャリーに、一つ一つ連合を組んで、案件を仕上げていくより他に、現実的なやり方はないように考えております。

本来ならば、そういう面倒なことをしない方がよいが、現実にはそうしないと国会は回らないんです。単独の政治勢力が、何もかもみんなとり仕切るような力はもはや

ありません。だから自民党が、安定した単独政権を守るように努力せにやいかんし、現に努力しておりますが、与野党伯仲状態では、いま言ったようにいろいろな苦心をして、ようやくと責任を果たしているわけです。しかし、いずれにしても自民党という政党は、このバックボーン政党としての責任は果たしていかなばならないし、実際、その責任を果たしておるわけです。しかし将来、自民党だけでやっていけるかどうか、あるいは中道勢力か何かが参加してくるのか、そのあたりは、まだわかりません。しかし、少なくともはじめに述べたように、政権を有効に運営して国民の期待に応えるために、それに相応しい運営の仕方をやっていくという課題は、いつでもやらねばならぬことと思っています。

田中　やはり中核としての自民党の存在は、今後とも必要という考えですね。

大平　ええ、それで自民党の力が弱くなったら、他の政党との組み合わせが起こるかもしれませんけれどね。

野党の体質をこつみる

田中 まあ多党化時代ということで、いくつかの政党があり、それをイデオロギー的に色分けすると、左、中道、右ということになるんですけれども、少なくとも近い将来において自民党と手を結び得るのは、おそらく民社党であり、公明党であり、あるいは新自由クラブということまでで、共産党とか社会党、特に社会党の中の協会派の連中は、イデオロギー的にもかなりまだ開いていますね。そうすると連立の具体的な可能性としては、民社党または公明党というところが、自民党と結び得る中道勢力として、もっとも可能性があると思うんですけれども、その民社党、公明党についての大平さんの考え方をお聞きしたい。

大平 日本の政治地図は北欧式でもないし、南欧式でもない。もっと安定した勢力構造を持っていると思います。北欧をみると保守勢力と社会民主主義勢力とが対立関係にある。それから南欧の方は、保守勢力と左翼勢力と二つの勢力が対立している。日本の場合は、保守勢力が北欧や南欧よりもっと強く、そこへもってきて、相当大き

な中道勢力という重しが付いております。だから私は日本の政治勢力の構造は、北歐型でもないし、南歐型でもなく、いふなれば日本型で、比較的安定しておると思いますが。日本では北欧より左翼は強いけれども、逆に中道勢力は大きいし、保守も強い。

それから南欧に比べて、左翼は弱いけれども、そのかわり中道勢力が相当大きく、保守党は、もっと強いというような関係になっております。

そういう状態のなかで中道勢力と言われるのは、日本の場合は四つあって、公明党、民社党、新自由クラブ、社民連ということになっておる。一方、左翼勢力というのは共産党と社会党なのですが、社会党はそうかちつとしたものではなく、準中道性というのか、何というのか、そういう性格も持っておる。

田中 社会党は内部が二つに割れている。協会派は左翼勢力だが、右派は準中道派でしょう。

大平 社会党はちょっと捉えにくい状態にある。公明党というのは、政治を比較的現実的にみて、そして単に批判にとどまらず、政策の形成に相当積極的に参加している、ということのような、現実的勢力のように思われます。

つまり、左翼のラジカルな批判だけ、対立だけという態度に飽き足りない勢力で、私どもにとっては協力を願える場合が相当ある。しかし公明党の協力をお願いするには、こちらで相当の政策的代償を支払わねばならず、なかなかそう簡単じゃないですよ。

田中 公明党は自民党にとって、かなりの代償を支払っても協力を仰ぐに値する政党といえますか。その点はどうです。

大平 もちろん値する場合と、そうでない場合とがある。

田中 ケースバイケースで判断するということですか。

大平 ケースバイケースということで、外交なら外交、あるいは内政の一部門なら一部門で、実際に政策協定をやるまでには、まだ熟していません。つまり、まだそこまで問題が整理されていない状態です。

田中 では民社党はどうですか。民社との提携は機が熟したといえますか。

大平 民社も公明と同じです。

田中 公明党については、党の体質としてファシズム的な色彩を指摘する声が左翼側にあるんですけれども、大平さんはどう思われますか。

大平 そういうことはないようです。公明党は私の分析というよりも、政治学者の分析と申し上げておく方が無難と思いますが、都市政党で、社会的地位とか財産とかいう環境の中で、比較的恵まれないという方々、しかも道義心が一本通っているという支持層を持ってある。それに比べると民社党は、より西洋的デモクラシー政党に近いようです。

田中 体質はともかく、イデオロギーや思想はなかなかハイカラな政党だと思いませんね。西欧的な社会民主主義政党ですから。

大平 ハイカラといったら失礼かもしれないが、公明党と違った意味で、日本的で、かつ西洋的なオリジンを持っているように思います。

田中 民主社会主義というのか、あるいは社会民主主義とでもいうんですかね。

大平 社会民主主義の、社会主義インターナショナルの流れを汲む政党です。そういう意味で、公明党より民社党支持層には、高学歴者が多いようです。

田中 支持層はそうですね。一流会社の部長や課長クラスがいるし、政策的には財界などでも共鳴者が多い。ただパンチが足りない。そこが物足りないんです。

大平 民社は公明党とは、非常に違った体質を持っていると思う。

都市と農村は対立せず

田中 いま大平さんは、公明党は都市政党的ということを言われたんですけれども、日本の政治における都市的と農村的ということを考えてみたい。

たとえば米価問題とか、あるいは土地政策ということになると、政党は右の自民党から左の共産党まですべて農民党になってしまう。そういう批判もあるんです。今の政党全部が農民党的だという批判です。いまの選挙制度だと都市の投票者の権利や声は、必ずしもその人数に応じて正確には政治に反映されない。政治の舞台で、都市住民が本来受けるべき権利が不当に低く評価されているという、こういう声がある。

大平さんは香川県の農村出身ですが、都市の票と農村の票の重みの問題をどう考えられますか。たとえば産業構造をみると、第一次産業はどんどん減っている。水産とか農林に従事している人々の数が相対的に非常に少なくなつた。しかし、それが現実

に政治の世界においては、まだかなり大きな力を持っている。そういうことで日本の

都市住民というのは、政治的にみると不当に虐げられているという声があります。

大平 私は、そういう考え方はとりません。都市とか農村とかに分けるけれども、日本人というのは、さかのぼればみな農民です。

田中 日本社会全体がそうかもしれません。さかのぼりますとね。都市の労働者もかつては農村出身だった。

大平 それで農村社会、つまり第一次産業では雇用の機会がないもんだから、否応なしに都会に出た。都市生活者といっても、農村に精神や生活の根っこを持っているんです。

田中 日本人は根っこに農民的なものを非常に持っている。

大平 持っておるんで、都市政策と農村政策、都市と農村とに分けて、これを対置して考えるというのは、私は間違いだと思います。農村を基盤に持つ人が、大体まあ、どこでも日本社会の力になっているんじゃないでしょうか。

それから、農村の社会というのは比較的社会的で、選挙なんかでも投票率が高いし、有権者と候補者との間のつながりというのは濃密です。都市にくると両者の関

係は、疎遠になる。だから政治の世界で都市が軽視されているというんではなくて、有権者と候補者の関係が、薄くなるというのが正確ではないでしょうか。つまり都市の住民は政治に対して、もっと積極的に関与するように、考えていただかなければいけないと申し上げたい。

田中 影響力は出てきませんね。それは都市住民の怠慢でしょう。

大平 そう言えないでしょうかね。

田中 それから産業構造の変化とからみ、以前、石田博英さんなどが、だんだん第一次産業のシェアが低くなって、二次産業のウエートが大きくなり、いわゆる製造業、とくに重化学工業の分野が高くなる。そうすると労働者というか、雇用者がふえてくる。この層を自民党がつかまなければ、保守党にとっての将来はないんだということ、保守党と労働組合との関係に注目しました。労働者は何も革新政党だけに独占させる必要はない、むしろ自民党が取るべきである。こういう主張が行なわれました。第二次産業は、最近でこそ不況のためにちょっと停滞しておりますけれども、今なお大きなウエートを持っている。

それからさらに今度は第三次産業がどんどん成長して、ウエイトを増している。この従業員、その就業者の数は、すでに日本全体の就業者の半分以上、おそらく六〇%近い状況になってきていると思います。そういう産業構造の変化と、それを基盤とした政党支持の変化といえますか、こういう問題についてはどういうお考えですか。

大平 まあ、そういう面も確かにある。そういう産業構造と政党支持との関係は、大体において比例的に出てきます。ここ二十年ぐらいの経過をみても、第一次産業が四〇%ぐらいの人口比率を持つておったのが、今ではまあ、一―二%ぐらいになった。その間に自民党が六〇%近くの得票から、だんだん落ちて四二%ぐらいになった。だから確かに、端的に産業構造の変化が得票に出ています。ただしそれでは、労働組合政党と言われている社会党が、第二次産業の進展に比例して伸びたかというところではない。社会党がまた自民党と同じように、一〇%以上の大幅の転落を示しております。ではその票はどこへいったかというところ、公明党と共産党と無党派層にいつている勘定になります。

田中 その間、民社はほとんど横這い。

大平 半分ぐらいが、公明党と共産党へいつている。残り半分ぐらいが無党派層という、政党を支持しない層へ流れていつている。だから労働組合と政党の支持率との関係は、必ずしも判で押したようには出ていないんです。そこで注意しなければならぬことは、有権者が、だんだん多党化してゆき、主婦とか、退職者とか、いつところの無党派層に少しずつ吸収されておるといつ経過や事実なんです。われわれ自民党が真剣に取り組まねばならないのは、社会党や、その他の野党との闘いよりは、無党派層との闘いなんです。最近はもう公明党も共産党も、その党勢は頭打ちのようですから。

それからさらにいえば、労組の中もだんだん多党化して、社会党だけの支持に絞ろうとしても、絞り切れなくなつてきていつる。二割や三割は自民党に入つていつるのではないでしうか。ですから、そこはあまり形の上でとらわれる必要はない。むしろ、われわれの意識とわれわれの実践が、時代時代の要請に対応できておるといつことになければいつけないように思いつます。

ネライは無党派層と女性票

田中 なるほど。自民党にとって既成野党はあまり脅威ではなく、むしろ無党派層の進出が最大の関心事になりました。政治的アパシー族をいかに惹きつけるかが最大の使命であると。その場合の無党派層の中での、圧倒的に大きな存在として女性と主婦層がありますが、政治的パワーとしての主婦層、これは非常に大きな問題ですね。

大平 問題になってきました。

田中 自民党として、それにどう対応するかということですね。

大平 この頃、自民党本部で坐っておると、随分女性の方がくるんです。男ばっかりがくる自民党本部かと思ったら、女性が多くなってきた。

田中 みてみると、かなりみうけられますね。今日も大勢いる。

大平 まず、女の人は家庭の仕事が機械化され、電化されてきたので時間にゆとりが出てきた。食事なども極めて簡単にできるようになった。洗濯物も機械で洗えるし、

まあ、何といえますか、よほど暇ができた。問題は、その余暇をどう活用するかということです。主婦の方々のグループ活動も、活発になりました。

田中 趣味や教養のためのグループ活動など、最近はとても盛んですね。

大平 それから新聞、ラジオ、テレビなどは、男よりもよくみているに違いない。だから女のの方が、このごろは肥えた知識、豊富な情報を持っているのではないですか。それだから私は、講演でも言っているんだけど、勤め先へ行って、上役の顔ばかりみながら仕事し、すし詰めの電車に乗って帰ってきて、気まぐれに漫画などをみていると、男は女に遅れてしまうのではないかと心配している。

田中 亭主族は体力的にも頭腦的にもますます低下してくる。女房族に頭が上がる。ない。(笑)

大平 亭主が奥さんに負けかねない。そういう時代になりました。それで、この奥さん方が関心を持つのは、もはや物価や教育ばかりではなく、いろんな政策にそれぞれ一家言を持つようになってきた。だから、どの政党も婦人層にどういう対応するかということが大きな課題になってきた。女性は鋭敏な政治感覚を持つておるとい

前提で、内政、外交全体についても厳しく対応しないといけない。これは女性向きの政策でございます、というような簡単な調理では、もう間に合わない。そういう時代になってきたと私は思う。

田中 今までは、何か女性というものを特殊的な存在としてとらえ、女性向きの政策とか、女性向きのアプローチとかいうものがあつたけれど、今日の時代はそうじゃない。

大平 今に、婦人パワーはえらい力になってくるような気がしてならない。

田中 婦人パワーをいかにして、自分達の陣営に惹き付けるか、彼女達の要求にいかに応えるかということが、自民党はもちろん、野党にとつても大きな課題になるということでしょう。その点は自民党は自信がありますか。

大平 自信はないけれども、それが課題になってきたことは、痛切に感じている。だから、みんなで考えようじゃないかといっている。ここに、これからのわが国の政治上の大きな問題があるんだぞ、ということを私は去年から今年にかけて、党内にやがましく言って回っているわけです。

平衡感覚に富む国民

田中 それからどうでしょう、最近の政治の流れというものをみてみると、ある意味で復古的なきざしというんですか、そういう現象が全体にみられると思うのです。端的に言つと、元号を制定しろというのもあるようですし、憲法の改正論も目立ってきました。それから安全保障に対しても再検討するとか、国防意識というようなものもかなり高まりつつあるようにみえる。そういうものを右寄りの動きと規定することが、果たして正しいかどうかは別として、そういう最近の動きに対して、どういう所見ですか。

大平 私は政治にサイクルというか、周期というか、そういうものがあって、ある時期は収斂的に政治が動き、ある時期は発散的に動く。そのサイクルの長さはどのくらいかということですが、私はこのことについて、林房雄さんのご生存中に、いろいろ議論したことがあるんです。林さんの説は大体二十年だということです。明治の初年

から二十年までは文明開化期。明治二十年から四十年までは国粹化の時期、明治四十年から大正デモクラシーが、ちょうど満州事変から支那事変まで続き、それから今度は軍国主義になって終戦を迎えたわけです。戦後は、また二十年ぐらい、いわば手ばなしの理想主義的なデモクラシーの時代が続きましたが、どうも昭和四十年頃から、この点について反省が湧いてきて、今はちょうど一つの収斂的時期に入っている、そういうサイクルにきているんじゃないかというお話がありました。私は興味深く拝聴したわけです。日本人というのは、一方のほうに走りきるといふことはしないんです。一方のほうに走って限界までいくと、やっぱり反省が湧いてきて別の方向に向かう。

今は、まだもう少し、収斂が続くんじゃないかと思う。林さんの歴史的周期説というものによると、そういうことが言えるんじゃないかと思っています。

それで、現在も国防問題や元号問題などいろいろ出ておりますが、それはそれとして真面目に追究すべきであると思います。ただそれだけで、政治を独占するわけにはいかないのです、やはり他の政策と十分バランスをとって考えていくべきであると思います。

田中 振り子が左に揺れた。あまり揺れるといかんといいことで、今度は逆にもとの方向に戻りつつある。右に揺れた場合もおそらくそうでしょうし、絶えず日本人の場合はもとに戻る習性があつて、そういう意味では、かなり政治的に安定した国民性といえるのではないだろうか。

大平 そう思います。日本人は相当な平衡感覚を持っています。

田中 政治的にかなり成熟しておると言えるわけですね。

大平 成熟していますね。まあともかくロッキード事件のあと、一昨年の総選挙、去年の夏の参議院選挙をやりましたが、国民は結局、自民党に過半数の議席を与えました。しかしながら、それは過半数ストレスで大勝利は与えなかった。(笑) なかなか心憎いですね。

田中 国民が一人一人意図してやったわけじゃないんだけど、結果においてそういうことが出てくるというのは、面白いですね。どうですか、やはり日本国民の教育水準の高さ、あるいは成熟した判断力とか、そういうものかしらしむところなんでしょうが。

大平 いや、やはり大事なことは、日本が開かれた社会であるということではないですか。

田中 それがチエックとして働いている。そうすると今のこういう右寄りの流れというものが、そのまま突っ走って、再び戦前のファシズムとか、そういうものになる可能性は、まずないというふうにお思いですか。

大平 経済のやり方がまずくて、大量の失業が若者の間で出てきたりするとわかりませんが、しかし、そこはそうならないように努力していかなばなりません。